

# HIMALAYA

# ヒマラヤ

# No. 314



**1998 JANUARY**



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

**日本ヒマラヤ協会**

# 1998年H A J 登山隊員募集

## ニンチン・カンサ (7,206m)

ラサから半日行程の所にヤムドク・ツォと呼ばれる大きくて美しい湖があります。その湖を見下ろすようにそびえているのが名峰ニンチン・カンサです。日本隊は既に3隊が登頂に成功しています。ラサからゆっくりと入山し、登山期間は26日間を予定しています。

H A Jの登山隊は全てガイド登山ではありません。自己責任を認識して登山隊を構成します。

記

1. 期 間:1998年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負担金:80万円
4. 切り:定員になり次第
5. 申し込み:H A J事務局まで

## 海子山 (5,000m級)

四川省西部、理塘の南にある稻城県の名所、海子山にて5,000m級の登山とトレッキングを楽しむ

### 表紙写真

天候が悪かったため周囲から見えず初めてニンチン・カンサ峰7,206mのピークを見たのは6,500mのC2であった。

B Cを撤収してラサに戻る日はすばらしい天気になったので下山ルートから外れた西側の尾根を下降しニンチン・カンサ峰の全容を見ることが出来た。

(B C手前4,600m付近から。左のピークが頂上-野口道雄記)

みます。311号で紹介したように、古寺と湖沼の多い知られざる地域です。隊長は酒井國光さんの予定です。

記

1. 期 間:1998年8月1日～21日(21日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負担金:60万円
4. 切り:定員になり次第

## 未踏峰 (カバン 6,717m)

ガネッシュ・ヒマールとランタン・ヒマールの間は、数多くの知られざる山々があります。そのほとんどは6,000m級ですが、これまで全く試みられたことのない山群です。山容は7,000m級の山です。楽しい登山が期待できます。概要は下記のとおりです。

記

1. 期 間:1998年9月18日～11月1日(45日間)
2. 募集人員:6名程度
3. 負担金:95万円

## ヒマラヤ No.314

1. 創立30周年を迎えて 遠藤 登
3. 日本ヒマラヤ協会創立30周年記念行事案内
4. ニンチン・カンサ峰登頂
22. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・インフォメーション〉
24. 寸感・事務局日誌

# 創立30周年を迎えて

会長 遠 藤 登

日本ヒマラヤ協会（英文略称H A J）は、昭和42年（1967年）10月の創立以来、広大なヒマラヤ地域（ネパール、インド、パキスタン、アフガニスタン、旧ソ連、中国、ブータン）を舞台に登山・踏査・河下りなどの野外活動を展開すると共に、自然科学・人文科学についても調査・研究・実践し、30年を迎えることができました。

30年の間には、未踏峰・未踏査地域をめざした隊、高所の困難な課題を求めた隊、豊かで楽しい旅に夢を实らせた隊など、それぞれの時代にあった活動を続けた結果、2600名という多くの人々がH A Jの旗の下に集い、魅惑的なヒマラヤの山野での活動に参加した会員の数も実に129隊延べ887名という多きにのぼり、ヒマラヤ登山の大衆化の一翼を担う結果となりました。

ヒマラヤを舞台にした登山・踏査に代表される野外活動には、「高所」なるが故の様々な困難な問題が潜んでいました。そのような実践の妨げになる問題を解決するために、H A Jの主催による研究・研修会が全国各地で続々と開かれ、一般にも公開されて好評を博して参りました。その中には「インド・ヒマラヤ会議」のように、18年の長きに渡って開かれているものもあります。

しかしながらこのような地道な研鑽や努力を積み重ねているにもかかわらず、雪崩などの原因により、20名がヒマラヤの山々に眠るといふ誠に残念な事故も起きております。今更ながらにヒマラヤの大自然のもつ破壊力の物凄さを思い知らされると同時に、これらの事故の原因を探り次の活動の戒めに繋げるべく努力しているところであります。

ヒマラヤ地域の地理的な位置が、国際社会の複雑な対立構造の中で微妙であった時代には、登山・踏査を実践するためには、より正確な情報が求められておりました。H A Jでは、これらのニーズに応えるべく、ネパール、インド、ブータン、パキスタン、中国各政府の登山担当責任者を招請し、全国各地で研究会を開催し一般に公開して参りました。また、これらの機会を通して、ヒマラヤ諸国との交流を積極的に進めて参りました。また、時代の要請として「山岳環境の汚染防止」につきましてもヒマラヤ地域の実践的な提言をはじめとして、積極的に情報を提供し関係団体と協力して啓蒙活動を展開しておるところであります。

これら登山・踏査などの野外活動の結果につきましては、その都度報告書としてまとめられ希望者が自由に手にすることができるようになっておりますし、研究・研修会等の資料につきましてもまとめられ、特に、中国、インドにつきましては個別に手引書としてまとめ、ヒマラヤをめざす登山者の参考書ともなっております。さらに、このような野外活動や研究・研修、交流活動やヒマラヤ地域の情報は、毎月定期刊行しております機関誌「ヒマラヤ」誌上にて逐一報告され、会員内外に提供されております。その「ヒマラヤ」も本号をもちまして314号を数えることができました。

このようにH A Jが無事30年を迎えることができましたのも、会の草創期を作り上げた柴田前会長や沖元専務理事をはじめとする、歴代役員の皆様の弛まぬ尽力があったればこそでありますし、何よりもその役員を支え続けた2600余名の会員が、H A Jの旗の下に集っていただいた結果であります。そして、H A Jの活動に物心両面からご支援いただいた各界の皆様、ヒマラヤ諸国の関係の皆様に厚く御礼を申し上げます。

今後とも、ヒマラヤ地域での活動を続け、微力ではありますが登山界の発展と国際交流の進展に寄与すべく努力する所存でありますので、ご支援・ご鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。

平成10年1月1日

## H A J 国別・標高別入山表

上段：入山数 下段：死亡数 上段（ ）内は女性 下段（ ）内は死亡率

	中国		インド		ネパール		パキスタン		ブータン		アフ旧ソ連		合計	
8000m 峰	3	17	1	14	3	39	4	28	—	—	—	—	11	98
		(0)		(2)		(1)		(1)						(4)
	0	0	0	0	1	1	1	4	—	—	—	—	2	5
					(2.6%)		(14.3%)							(5.1%)
7000m 峰	20	156	15	140	1	7	2	14	1	10	1	3	40	330
		(11)		(20)		(0)		(1)		(1)		(0)		(33)
	3	7	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4	8
		(4.5%)		(0.7%)										(2.4%)
6000m 峰	9	64	8	76	3	21	1	3	1	9	0	0	22	173
		(15)		(16)		(0)		(0)		(0)		(0)		(31)
	0	0	1	7	0	0	0	0	0	0	0	0	1	7
				(9.2%)										(2.4%)
5000m 峰	6	44	1	4	0	0	0	0	0	0	1	9	8	57
		(7)		(0)								(0)		(7)
登山の合計	38	281	25	234	7	67	7	45	2	19	2	12	81	658
		(33)		(38)		(1)		(2)		(1)		(0)		(75)
	3	7	2	8	1	1	1	4	0	0	0	0	7	20
		(2.5%)		(3.4%)		(1.5%)		(8.9%)						(3.0%)
野外活動	11	31	9	28	20	135	3	12	3	16	2	7	48	229

# 山の情報誌「岳人」



毎月15日発売 (日・祝日の場合は前日) 定価700円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。

直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。

郵送料は124円です。年間購読料は8,900円で送料は当社負担です。

お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

98年

- ★ 1月号
- 2月号
- ★ 3月号
- 4月号
- ★ 5月号
- 6月号
- ★ 7月号
- 8月号
- 9月号
- ★ 10月号
- 11月号
- 12月号

特集

- ぼくの好きな雪の山小屋で粉雪わけて爽快山スキー
- 駅から登るとっておきの山
- 新緑と残雪を求めて5月の山
- 山の本、名作をめぐる春山紀行
- 高層湿原、もう一つの尾瀬へ
- 夏は北海道の花と溪流へ
- 真夏に涼を求めて、高原へ
- 初秋の単独行の山歩き
- 上信越の紅葉をさぐる
- 名峰を訪ね、冬枯れの温泉へ
- 冬山入門、心構えと特選コース

(★は特大号となります)

東京新聞出版局 (中日新聞) 〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 TEL 03-3740-2674  
 (東京本社) 全国の書店で発売中/中日新聞販売店でも取りつぎます

# 日本ヒマラヤ協会創立30周年記念行事案内

1998年1月25日(日)

## I. 式典・講演の部

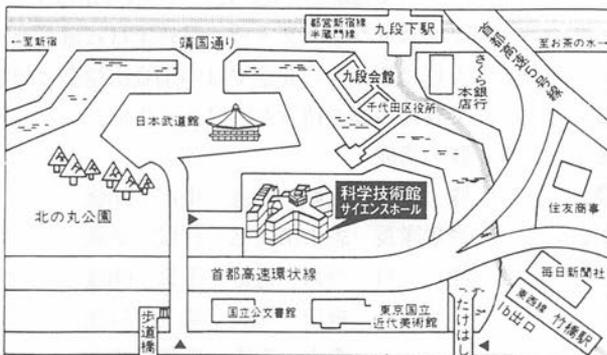
- 1) 場所：科学技術館・サイエンスホール
- 2) 日程：
  - 9:00 開場
  - 9:15 主催者挨拶(会長 遠藤登)
  - 9:30 30年間のあゆみ(理事長 稲田定重)
  - 10:40 記念講演：ヒマラヤの三大峰を語る  
〔名塚秀二氏〕 厳冬のサガルマータ南西壁、チョゴリ北西壁、カンチェンジュンガ北東支稜を登り、ヒマラヤの東から西までの巨峰について、現在日本では最も多くの八千メートル峰登頂の記録(6座7回)を持ち、群馬県山岳連盟海外研究会委員長、H A J理事として活躍中の氏が、ヒマラヤの美しさと厳しさ、そして楽しさを語る。
  - 正午 昼食
  - 13:00 講演「ヒマラヤ諸国の登山の現状と問題点」下記の方々を予定しています。  
中国(中国登山協会・曾曙生主席)  
インド(HJ編集長・ハリシュ・カパディア氏)  
ネパール(ハルカ・グルン博士)
  - 17:30 感謝状贈呈式

- 3) 会費：無料(公開ですので会員外の方も可)
- 4) 申し込み：電話・FAX・ハガキなどで、会員の方は会員番号と氏名を、会員外の方は住所、氏名、年令、性別を明記して〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7 萬栄ビル501号 日本ヒマラヤ協会  
※申し込み者は、すべて出席できます。  
当日、直接会場へお越し下さい。

## II. 祝賀会の部

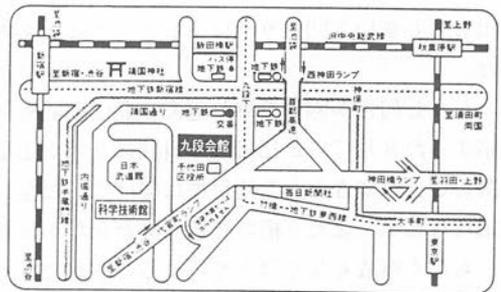
- 1) 場所：九段会館 千代田区九段南1-6-5
- 2) 日程：18:30〔開宴〕  
主催者挨拶、内外関係者祝辞  
20:30〔閉会〕
- 3) 会費：13,000円〔会費の中には「日本ヒマラヤ協会創立30周年記念誌(約400頁)代」が含まれております。記念誌は当日お渡し致します〕
- 4) 申し込み：住所、氏名を記入の上「祝賀会」と明記して郵便振替 00100-6-48954 「日本ヒマラヤ協会」宛、会費を納入して下さい。〆切1月10日まで。

### ・科学技術館・サイエンスホール



科学技術館 ●地下鉄竹橋駅(東西線)下車1b出口 徒歩7分  
(北の丸公園内・日本武道館手前)

### ・九段会館



- 九段会館 ●JR東京駅から車で約5分  
●JR上野駅から車で約13分  
●JR飯田橋駅から徒歩約10分  
●地下鉄九段下駅(東西線・新宿線・半蔵門線)から徒歩1分  
●羽田空港から車で約30分  
●東京シティ・エアターミナル箱崎から車で約10分  
●首都高速西神田ランプから車で約1分

## サマーキャンプ

# ニンチン・カンサ峰登頂

## HAJニンチン・カンサ登山隊1997

### はじめに

日本ヒマラヤ協会は、これまで会員の要望に応じて休暇の取りやすい夏の期間に、比較的天候に恵まれそうで短期間の登山が可能なヒマラヤの高峰で登山活動を行ってきた。それはインドのガルワール、カシミール、中国の新疆ウイグル自治区であって、それぞれ大きな成果を収めてきた。

そして今回初めて岳人のあこがれの地チベットにフィールドを求め、ニンチン・カンサ峰がその対象に選ばれた。

ニンチン・カンサ峰は、チベット自治区の首都ラサの西方約200kmの地点にあり、アプローチは短い、堂々たる氷河を従えた立派な7,000m峰である。

この山に登るため北は宮城県西は広島県から14人の仲間が集まったのは1997年の1月のことであった。準備の段階で副隊長を予定していた1名が家庭の事情で不参加となったが、ともかく13名が力を合わせて計画を練り上げ、準備活動を終え、そして全力で登山を行ってきた。

登山活動は必ずしも順調ではなく、悪天に悩まされ、また隊長の未熟さもあり、何人もの病人を出してしまい5回もラサに下るということもあった。

しかし何とか困難を乗り越え、登山期間も押し詰まった8月17日と18日の2日間に9名が山頂を踏むことができた。当初目標に掲げていた全員登頂はならず、また2桁の登頂も果たせなかったが、ともかく事故もなく登山を終えることができたのだから、成功とってよいであろう。

登山を終え帰国した隊員たちはまたもとの忙しい日常へ戻っていったことであろうが、夏の39日

間、苦楽をともにしつつ大自然に抱かれていた思い出は、きっと心のどこかで己を支える力となっていることだろうと思う。

この登山を支えてくださった、HAJ事務局、中国登山協会、チベット登山協会、その他多くの方々、そして隊員の家族の方々に御礼を申し上げつつ、われわれの登山の記録を報告したい。

(隊長：天城 敏彦)

### 登山の概要

#### 1 目標の山

中華人民共和国、西藏自治区ニンチン・カンサ峰 (7,206m)

#### 2 登山期間 7月20日～8月27日 (39日間)

#### 3 登山の目的

- ①西面からのニンチン・カンサ峰の登頂
- ②山岳登山環境の保全 (テイクイン・テイクアウトの実施)
- ③中国と日本の友好親善交流

#### 4 結果

- ①8月17日6名、18日3名が登頂した。
- ②隊で持ち込んだものは回収しラサまで持ち帰った。ゴミは焼却した。ただし残念ながらフィックスロープとスノーバー、竹竿は残置した。
- ③友好に務めた。北京では中国登山協会に対して答礼の宴を持った (HAJ主催)

#### 5 隊の構成

隊長	天城 敏彦	東京	50歳
登攀隊長	志小田美弘	宮城	38歳
隊員	野口 道雄	千葉	60歳
"	飛田 和夫	埼玉	51歳
"	森山 安次	東京	47歳
"	脇田 康治	広島	46歳

隊員 鮫川 太一 茨城 46歳  
 “ 石川 龍彦 兵庫 45歳  
 “ 加藤 和美 愛知 44歳  
 “ 滝田 収 福島 40歳  
 “ 高橋 敏雄 宮城 38歳  
 “ 川崎 浩史 埼玉 33歳  
 “ 森 達弥 福島 26歳  
 連絡官 趙 玲玲 北京 40歳  
 通訳 張 少宏 四川省 28歳  
 コック 黄 彦 四川省 28歳

実行委員：中川 裕（同）  
 “ : 登山隊員

日程

7月20日 成田→北京（飛行機）  
 21日 北京→成都（飛行機）  
 22日 成都→ラサ（飛行機）  
 23日～24日 ラサにて出発準備  
 25日 ラサ→ランカーズ（車）  
 26日～27日 高所順応訓練  
 28日 ランカーズ→BC  
 29日 } 登山期間（23日間）  
 8月20日 }  
 21日 ベース・キャンプ清掃日  
 22日 BC→ラサ（車）  
 23日～24日 ラサ滞在  
 25日 ラサ→成都（飛行機）  
 26日 成都→北京（飛行機）  
 27日 北京→成田（飛行機）

6 推進の組織

日本ヒマラヤ協会ニンチン・カンサ峰登山隊  
 実行委員会

会長：稲田 定重  
 （H A J理事長）

委員長：山森 欣一  
 （同 専務理事）

副実行委員長：天城 敬彦  
 （同 登山隊隊長）

実行委員：八木原 囿明  
 （H A J常務理事）

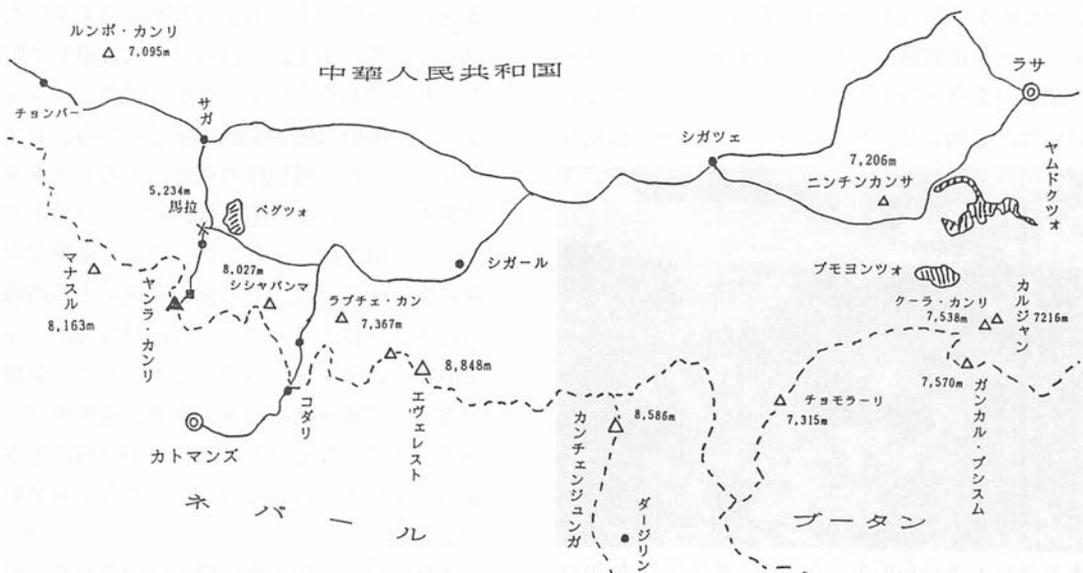
“ : 寺沢 玲子（同）

往路キャラバン

——不安と期待の状態でチベット高原へ

今年の1月から数回のミーティングを重ね、安

ニンチン・カンサ位置概念図



達太良山と北アルプスの白馬岳での飲み会？（合宿）を終了し、それぞれの隊員が待ちわびていた出発日がやってきた。前日の7月18日の晩より、東京に集結した。H A J ルームで打ち合わせをして、その後少量のお酒で喉を潤し、翌日の出発を待った。これまで、それぞれが各々に抱いていた憧れのチベットに対する思いがつのついていたためか、実においしいお酒を飲むことができた。それから志小田登攀隊長、石川隊員、高橋隊員と私でしばらく味わえそうもない日本の味を求めて、夜の東池袋を徘徊した。結局お寿司屋さんで落ち着いた。そこで、日本製のビールとお寿司をいただいた。お酒が回っていたので、いまいち味がわからない。きっと、おいしかったのだろう。その晩、隊員たちは天城隊長宅とH A J ルームとに分散して泊まった。H A J ルームでは、みんなで雑魚寝した。

7月20日 雑魚寝から目覚めるとまずまずの天気であった。軽く朝食をすませ、集合時間を待った。10時10分にH A J ルームをあとにして、東池袋駅へ向かった。一緒に寺沢さん、天城隊長の奥さんも同行していただけた。山森専務理事もラサまで一緒であった。11時ごろ地下鉄を乗り継いで箱崎シティエアーターミナルに到着した。そこで野口さんと合流して、11時30分に荷物のチェックを終了後、リムジンバスに乗りこんだ。眠りについていたためか、あつという間であった。成田の第2ターミナルに到着後、軽く食事をとって、ゲートが開くのを今か今かと待った。14時45分にやっと開いた。定刻より、やや遅れて15時18分一路北京



▲カンパ・ラからのヤムドク湖 後方雲がかかっているのがニンチン・カンサ峰

へ向けて離陸した。機内では、ビールを飲んでい  
る者、寝入っている者とそれぞれの過ごし方をし  
ていた。北京に17時13分に着陸した（中国時間）。  
手続きや荷物を取り出すのに、だいたい30分かか  
った。迎えには、今回の連絡官の趙さんをはじめ中  
国登山協会の方々に来ていただいた。空港よりバ  
スに乗り、市内の食堂に行き、夕食をとった。大  
きな円卓2つに、中国登山協会の方々とわれわれ  
の約20名が食事の席についた。食事前に山森専務  
理事より挨拶があり、お土産が送られた。そして  
中国製のビールで乾杯が行われた。料理が次から  
つぎへと出てくる。その量の多さにまず驚いた。  
当然の事ながら出てくる物すべてが非常に油っぽ  
い中華料理であった。翌日（7月21日）の飛行機  
が朝早いので、ホテル（北京前門飯店）で早々に  
寝ることにした。

7月21日 6時30分にホテルのロビーに集合し  
て、弁当をもって、バスで空港へ向かった。空港  
で手続き済ませて、弁当を食べた。弁当の中身は  
サンドイッチ、もものジュース、ゆで卵、チョコ  
レートなどが入っていた。飛行機が離陸したのは、  
9時08分であった。機内でも朝食がでた。弁当を  
食べてまもないために、とてもたべられる状態  
ではなかった。成都に到着したのは、11時を少し回  
っていた。荷物を確保した後、手続きを済ませて戸  
外へ出ると、とても暑い。迎えは、今回の通訳の  
張さんと四川省登山協会の方々が見えていた。昼  
食のためそのまま、2台のバンに分乗して町にで  
た。北京でもそうであったが、建設ラッシュであ  
る。この国の力強さを肌で感じながら、レストラ  
ンに向かった。博物館の敷地にあるレストランで  
食事をとった。この国では、ビールが冷えている  
という状態が珍しいらしい。やはり豪華な中華料  
理の洗礼を受けた。その後、今夜泊まる西藏飯店  
へ行き、夕食まで、フリーとなった。私はシャワー  
を浴びて、部屋でくつろいでした。夕食は皆  
の希望？で陳麻婆に行き、麻婆豆腐を食べた。正  
直言ってこんなものか。連日の中華料理とさして  
変わらないように思えた。しかしとても辛い料理  
が多い。

7月22日 今朝も飛行機の時間のため、早起き  
した。日本でこんなに早く起きたら、そのあと眠

たくてしかたないが、ヒマラヤの高峰に登るとい  
う大きな夢のために我慢できてしまう自分に納得。  
ホテルを5時15分に出発した。空港内にはこんなに  
早朝なのに大勢の人々がいた。飛行機の窓より  
地球のシワが見られた。この大陸の大きさを思い  
しらされた。ミニヤ・コンカ、ナムチャ・バルワ  
等の山々が見られた。ラサへは1時間35分で着い  
た。午前中は高所順応のため体を休めた。午後は  
隊長らと市内観光で八角街などを見物した。ホテ  
ル（銀橋飯店）の階段の上り下りがとても辛い。

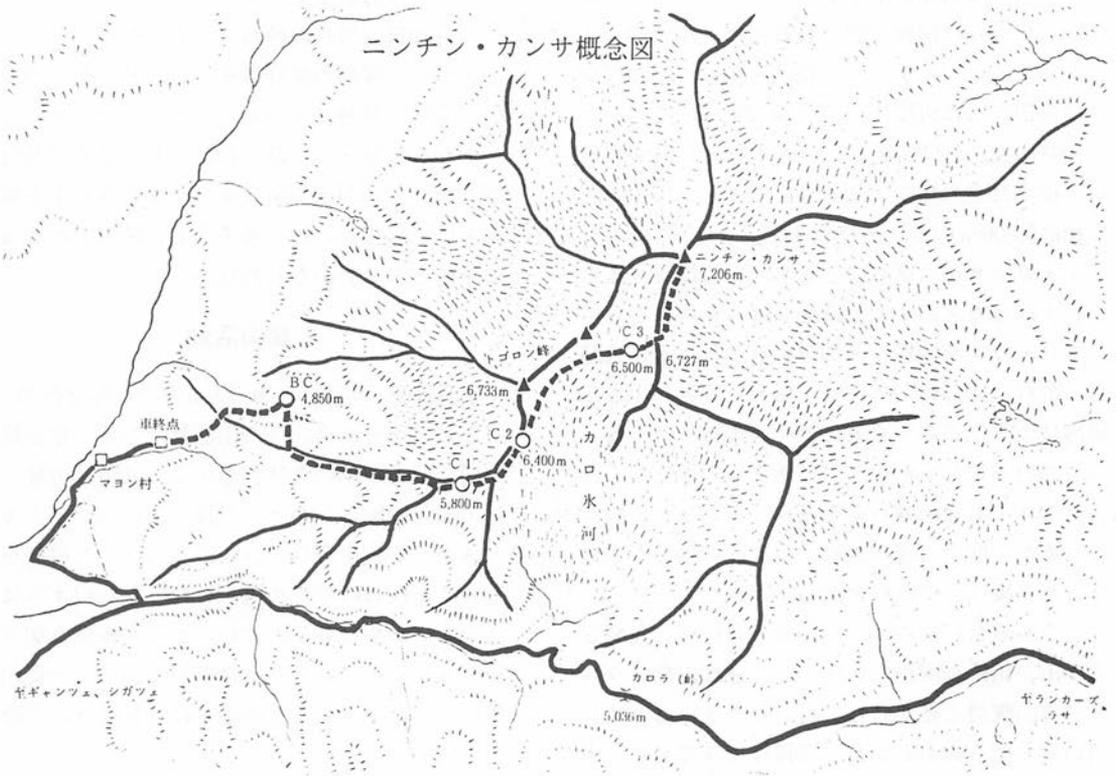
7月23日 ホテル内のレストランで朝食を済ませ、  
西藏登山協会へ向かう。テントを張り、先に  
送っておいた荷物の梱包を解き、チェックして再  
梱包をした。食糧の買い出しも同時におこなわれ、  
野菜、果物、米、卵などを買い込んできた。14時  
にだいたい作業が終了した。

7月24日 昨夜の夕食が原因か、夜中から下痢  
であった。7時に起床し、8時30分マイクロバス  
に乗って、ラサの郊外にある山（4,070m）の麓  
（3,665m）まで行く。ゆっくりと登りはじめた。  
9時15分に3,930m付近で休憩をとり、4,070mの  
ピークに到着したのは9時40分であった。

さらにもう少し奥へ進んでみた。最終的に4,0  
90mまで登って高所順応が終わった。11時45分、  
予定よりかなり早く下山した。

7月25日 8時55分に4台のジープとトラック  
1台に分乗してランカーズへ向かって出発した。  
途中カンパ・ラから真っ青なヤムドク湖を眺めな  
がら、ところどころ菜の花の黄色が印象的であ  
った。ランカーズの招待所に到着したのが15時近  
くなっていた。

7月26日 朝食後近くの山にジープで連れてい  
てもらった。石川隊員、鮫川隊員は体調不調のた  
め招待所で休息をとって、志小田登攀隊長、飛田  
隊員、趙連絡官はB C 予定地を調べにいった。  
ゆっくりとさらにゆっくりと山登りをしていたが、  
やはり4,500m以上になると息苦しくなり、足も  
思うように動かない。他の隊員がかなり先まで行  
ってしまっ見えなくなった。一番若いのに体力が  
ない。結局他の隊員は5,170m地点まで行き、私  
はと言うと4,900m地点までしか行けなかった。  
再び他の隊員らとゆっくり下山した。滝田隊員と  
野口隊員は近くの山を縦走して下山した。夜間、  
趙連絡官が肺水腫らしい症状を訴えたため、すぐ



にラサにある病院ヘジープで搬送された。

7月27日 昨夜から石川隊員がかなり酷い咳をしていたため、飛田隊員の付き添いでラサの病院に行くことになった（不在中の医療担当を野口さんをお願いする）。昨日高所順応した隊員はお休みとなった。志小田登攀隊長と鮫川隊員が近くの山へ高所順応に行った。昼食は久しぶりに焼きそばを作って、食べた。食べていたところに志小田登攀隊長から無線連絡が入り、鮫川隊員とはぐれたといった内容だった。急速、捜索隊が作られ、山へ向かった。天城隊長、川崎隊員、高橋隊員、滝田隊員が捜索隊となり、無線の中継に脇田隊員があたった。15時頃、鮫川隊員のみが帰ってきた。15時45分の交信で皆、下山した。遭難騒ぎは終わった。その夜のミーティングで単独行動の禁止ということが話された。夕食後、飛田隊員が帰ってきた。

（森 達弥記）

## BC設営

7月28日（曇り夕方一時雨） ランカーズ→BC

朝、鮫川隊員の熱が下がらず、このままの状態でのBC入りは無理と思われるため、相談のうえラサに下ることにする。昨夜ラサから戻ったばかりの飛田さんに再度同行をお願いする。

10時出発。谷間の道を高度を上げるとやがて氷河を従えた立派な姿の山も見えてくる。小1時間で標高5,000mのカロ・ラに到着。目の前にニンチン・カンサから落ちてくる氷河の舌端が見えるが、上部はガスの中。公路をしばらく西に走りニンチン・カンサ西稜の末端を回り込むように公路から離れ、10分ほどでマヨン村という名の小さな集落につく。このすぐ先にヤクが集結してくる。

21頭の予定だったがヤクがあまり大きくなく、またヤク工も登山隊の荷を運ぶことになれていないためか一度では運びきれずに2往復することになった（後に2倍の料金を請求された）。

ここからBCまでは1時間余りの行程。先発を志小田、川崎両隊員をお願いし、逐次出発。ラストの森山隊員と私がBCに着いたときにはトイレ用の穴も掘られおおかたの設営はできており、中

## ▼BC (4,850m)



国製の大きなメステントを張り終えると今日の作業はほぼ終わり。ここは栃木隊のABCにあたり、ニンチン・カンサの西面を見上げる気持ちの良い草原上で、すぐそばには懸垂氷河から流れ出る清流が流れ、ゴンパ（小さなラマ教の寺）もある。マヨン村の住民にとっては鎮守の森というところだろう。この庭先をお借りする形である。

ベース開きを行う予定が雨が降ってきたため延期。隊員は8人用の大きなテントに4、5人ずつ入るのだから居住空間も広く快適である。23時頃、鮫川隊員を送っていった飛田さんが戻ってきた。本当にご苦労さまでした。

7月29日（曇り後晴れ） BC整理

分担して隊荷の整理等を行うが私は絶不調。下痢、嘔吐、発熱でふらふらしてほとんど作業に加われなかった。ひと段落したところで昨日延期したベース開きの儀式を行うがかなり手を抜いたものとなった。この後不調者が続出したのはこの手抜きのおかげかもしれない。

## 登山活動

7月30日（晴れ） 5,300mまでの順化行動

この日から本格的な登山活動である。私は野口薬局の処方薬が効いて体調も戻る。9時20分発。全員で順化行動に向かう。西稜下部に向かってルンゼ状のところを登り、コルからはガレた斜面を急登する千枚岩状のため落石はなく見た目よりは歩きやすいがやはりしんどい。ガレ場を登り切った小さなピークで今日の行動を終え、ここを登山靴等のデポ地点とする。昼過ぎにはBCへ。午後は自由時間。

志小田登攀隊長と明日以降の行動の打ち合わせをしパーティー編成を行う。A：志小田、飛田、滝田、B：高橋、森山、加藤、川崎、C：天城、野口、脇田、森。

7月31日（晴れ） A隊（志小田、飛田、川崎）：B C→C 1 荷上げ

B Cではこの時期7時少し前から空が白み始める。テントを這い出るとC 2予定地近くのピークの上に淡い三日月が出ている。天気は上々であろうと思われる。

お粥と海苔の佃煮の朝食を食べ、A隊は8時にB Cを出発する。ブルーポピーが点在する草地からガレ場の急登となり、40分程で高度5,120mの鞍部に到着する。まだ順化が十分ではないため、足は重く、呼吸は乱れ、荷が重く感じられてしょうがない。さらに面白くもおかしくもない、単純なガレ場の急登に1時間程耐えて、9時40分、昨日のデポ地点に到着した。

小休止の後、出発の時点になって、滝田さんが不調であることを理由にA隊からの離脱を申し出てきた。数度の遠征経験者である本人の自己の現状認識を尊重し、追いついてきていたB隊の川崎君と入れ替えることにし、11時の定時交信でC隊の天城隊長に説明し、事後承諾を得た。

ガレの稜線上での上り下りを繰り返し、12時頃に5,700mの雪線に到着した。アイゼンを付け、すね位の深さの斜面を疲労困憊の状態に登り、三角岩に続く稜線からやや中尼公路側（南側）に下った高度5,800mのC 1 予定地に13時に到着した。歴戦の勇者飛田さんと国内で初期順応の為に富士山に7回登ってきたという川崎君はさすがに強く、



▲B Cから見る西壁と懸垂氷河。本峰は見えない。

30分も前に到着。

定時交信の後、下降を開始。14時過ぎに5,700mの雪線で、登ってくるB隊C隊（高橋、加藤、天城、野口、森）と出会う。15時に荷物を途中デポして下降する森山さん、脇田さん、滝田さんと合流してB Cへと下る。滝田さんの体調の悪さが見て取れる。

志小田、飛田は5,360mのデポ地点で、C 1下の雪田をB隊C隊が無事に下るの確認してからB Cに下る。B C着16時20分。B Cにはさっきつぶしたばかりの羊が届いており、新鮮な焼き肉、塩ゆでのスペアリブに舌鼓をうつ。

B、C隊（天城、野口、森山、脇田、加藤、川崎、森）：B C→C 1の荷上げ

A隊を見送って、10分間隔でB隊、C隊と出発する。デポ地点でB、Cは合流。滝田隊員が不調のため、川崎と代わった旨。ルートは所々右側を巻くが、基本的に稜線通し。A隊が雪線に抜けるのが確認できるが、このころより隊員の好、不調の差が現れ始め、今後の行動をどうするか思案する。標高差1,000mの初めての荷上げはきつく、結局、森山、脇田、滝田は雪線の手前に荷をデポし、5人でC 1へ。B Cから6時間30分かかっていた。

8月1日（晴れ時々曇り） 全員レスト

ゆっくりと10時に朝食。洗濯、ゴミ焼却、読書等各自思い思いに過ごす。志小田登攀隊長と今後のタクティクスについて打ち合わせる。C 3建設をめぐる意見が分かれるが、決定を先にのぼすことで一致。

昨夜から滝田隊員の不調が著しい。ひっきりなしにトイレへ通っている。下痢は遠征に付き物なので初めはあまり心配していなかったが、どうもただごとではない。夕方6時30分頃からガモフ・バックに入れる。気圧で800m位高度を下げるとだいぶん楽になるという。しかし1時間ほどで息苦しさを訴えられ、あわてて外に出す。しばらくは気持ちよさそうに眠っていたがまたトイレに通い始める。明日ラサに下ろすことに決め、今夜は隊員が交代してガモフ・バックに入れることにした。

8月2日（晴れ）

### ▼ガモフ・バック内の隊員を心配そうに見守る



飛田、天城が付き添い、他の隊員は2人1組2時間交代でポンプを踏む。滝田にはライターを持ってもらい酸欠の兆候が現れたら一端チャックを開け空気を入れ換え、直ちにまたポンプを踏む。45分おきにこれを繰り返す。チャックを開けると二酸化炭素でランタンの火が暗くなるのがはっきり分かる。効果はあるものの使い方に気を付けなければ恐ろしいものなのだ。

明け方とうとうとしている私を尻目に飛田さんが朝食の準備をする。いつものことながら素晴らしい気配りと計算である。志小田、張が先行しマヨン村でポーターを雇い、公路まで行って車を頼む役、脇田がBCで、森山が中間点でのトランシーバー係、他の隊員が滝田に付き添い交代で背負う役割と決め7時発。しかし滝田は頑張っで自力で歩く。昨日あれだけひどい下痢に悩まされたのに大した体力だ。3時間半で公路に着く。車は捕まらず、30分ほどたった11時、何という幸運、ラサに下っていた趙連絡官、鮫川、石川を乗せた車が戻ってきた。再度趙さん、飛田さんが付き添って、ラサの病院へ。全員BCに戻って一息ついたのは15時過ぎだった。

明日の行動について志小田と話し合う。13人の隊員で明日動けるのは9人。高橋をA隊に入れるが、昨晚皆休んでいないし、A隊はC1泊まりとなるため、この状態ではきつそうなのでもう1日レスト。B、C隊が荷上げと決める。

8月3日(曇り後晴れ、夕方雨) A隊、石川：レスト、B、C隊(天城、野口、森山、脇田、加藤、森)：C1への荷上げ、鮫川：デポ地点まで順化行動

2度目の荷上げとなるため、途中のデポ品を回収しながら登って前回より1時間ほど早くC1へ。テントを張る予定だったが対岸の山から黒雲がわきはじめ、悪天に捕まりそうだったので早々に下山。しかし結局悪天はこなかった。BCに着いたら昨日滝田に同行した飛田さんが戻ってきており、滝田から赤痢菌が検出されたという。他の隊員も罹っている可能性もあるため、薬を調達してきてくれており、全員それを飲む。また念のため1、2日レストとして体力の回復を図るとともに様子を見ることを提案され、とりあえず明日はレストとする。今まで使っていたトイレを埋め、作り替える等できることから予防に努める。

なおBCに戻ったところで脇田隊員から胃痛のため今回の登山からのリタイアの申し出があり、私は「しばらく預かりますから、もう少し様子を見てもいいのではないですか」と答え、本人もそうしてみると言った。しかしこれはとんでもない判断ミスだったようで、その付けは後日現れる。

8月4日(晴れ一時雨) レスト

午前中はトイレ作り、滝田の個装の洗濯等。昼食は鮫川作のチャーハン、森作のゼリーのデザート付き。午後からは自由時間。19時30分頃、何と趙さんとともに滝田隊員が戻ってきた。ずいぶん早い復帰に驚くがともかく一安心だ。

今日1日のみんなの様子を見て大丈夫そうなので、明日は行動と決める。

### 三角岩登攀

8月5日(晴れ) A隊(志小田、飛田、川崎)  
C1入り・三角岩基部工作



▲C1 (5,800m)

## ▼三角岩の登攀



7時50分BCを出発。9時10分、デポ地点到着。初めと比べると大分速くなったが、全く苦行以外の何物でもないガレ場登りである。12時C1着。1度目のC1入りと比べて1時間程速くなった。

志小田はC1の整理。飛田、川崎の両名で三角岩の基部取り付きまでのルート工作へ。5ピッチをフィックスし、この日はC1泊まり。

B隊（高橋、森山、加藤）、C隊（天城、野口、鮫川、森）：C1への荷上げ。石川：5,500mまで順化行動。脇田、滝田：レスト

A隊から30分遅れで出発。雪線に出るあたりからA隊がルート工作をしているのが見える。われわれがC1に着いた13時30分頃には、5ピッチのロープを張り終えC1へ戻ってきた。ご苦労様。テントを張り足し、16時すぎBC帰着。

夜の交信で飛田さんから腰を痛めたようなので湿布を持ってきてほしいと言われる。困ったことになった。

8月6日（晴れ後風雪） A隊（志小田、飛田、川崎）：三角岩ルート工作

軽い頭痛をおぼえながら起床。天候はまずまず。ラーメンの朝食を済ませて8時30分C1を出る。昨日のフィックスをユマーリング。途中の小さなクレバスから過去の登山隊のフィックスロープがのぞいている。

壁の傾斜はさほどではないが、6,000mを越える高度でのダブルアックスはさすがにしんどい。途中のビレイポイントにも残置ハーケンやフィックスロープがあった。三角岩上部まで19ピッチを終始飛田さんがトップを務めた。

14時に三角岩を抜けた。下りはアプザイレンを

繰り返し、30分で一気にC1まで。下りの何と速いことか。テントに入り、コーヒーと焼きそばで一息つく。壁の中にいたので、そういえば朝からほとんど食べていなかった。

C1で下から上がってきたB、C隊とD隊と合流する。B、C隊はC1泊、D隊の石川さん、滝田さんは15時BCに下る。

16時頃から雷鳴が轟き始め、間もなく真横に稲光が走り、激しいあられが降る。大雷鳴と閃光が同時に走り、雷の真っ直中にいることを知る。激しい風、耳をつんざくような雷鳴。会話もできないほど激しくテントを叩くあられ。その後テントの雪かきをする。

BCに降りた滝田さんとの20時の定時交信では、BCでは16時から17時の間にあられによる5cm以上の積雪があり、隊員用のテント3張りがすべて潰され、現在は本降りの雨になっているとのこと。中国側スタッフも含めて、BCのメンバーは苦労しているのだろう。

20時30分過ぎ現在、C1はしんしんと雪が降る。雪崩が心配で、これでは明日は三角岩には入れない。

## 稜線へ

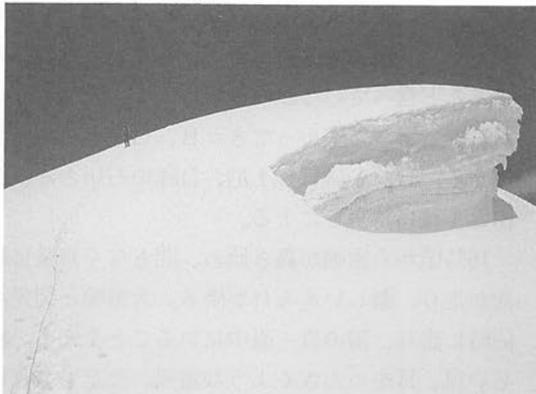
B隊（高橋、森山、加藤、鮫川）、C隊（天城、野口、脇田、森）：C1へ移動、D隊（石川、滝田）：C1往復

雪線のあたりからA隊が三角岩を抜けて稜線へ出るのが見える。3人とも元気そうで頑張ってくれている。第一関門はクリアできたようだ。脇田隊員もゆっくりながら元気そう。胃を空にしなければ痛まないと言う。

B、C隊は初のC1泊まり。激しい降雪の中、野口さんが何度も雪かきをしてくれる。こまめな勤勉な姿に頭が下がる。

8月7日（雪後曇り） A、B、C隊：BCへ朝はまだ雪が舞っていたのでとりあえず行動を中止する。10時頃から明るくなり始めたため、志小田、飛田と3人で検討した結果、一端BCに下り、体勢を立て直すことにする。12時過ぎC1発。これまで雪が着いていなかったガレ場も雪をまとい美しい。この下りで鮫川隊員がBC直前に転倒

## ▼C1～C2の登攀



して捻挫を負う。BCに着くと昨夜つぶされた隊員用テントは石川、滝田兩名によって立て直されていたが、1張りだけはポールが折れ天井が下がり、情けない姿になっている。

再度、志小田登攀隊長と今後のタクティクスについて話し合う。そろそろ大詰めが近づいてきており、アタックへ向けた日程調整も睨まなくてはならない。アタックメンバーの仮決定をする。

1次隊：志小田、飛田、高橋、森山、加藤、川崎、2次隊：天城、野口、脇田、鮫川、石川、滝田、森。これを念頭に置いたローテーションでC2までの荷上げを行ってアタック体制を作り、その段階で正式にアタックメンバーを決める。1次隊がC3を作りながらアタックする。

BCに入ってから仕込んだ「どぶろく」が程良く発酵しており試飲する。

8月8日（晴れ） A、B、C隊：レスト、D隊（石川、滝田）：C1へ移動

D隊は順調に行動している様子。どうやら一度は出遅れた2人とも何とか間に合いそうだ。しかし鮫川隊員は昨日の捻挫のため足首が腫れ上がり痛々しい。また森隊員も発熱で元気がない。せっかくここまで頑張ってきたのだから、何とか回復してほしい。

昼は川崎作の日本そば。圧力釜でそばを茹でるのは難しいのだが、うまく茹だっていておいしかった。

私は1人でBCから山裾を北上し、来年の登山隊の偵察をかねて主峰の様子を見に行く。1時間ほど行くとはっきりと主峰の西面が見渡せる地点に着く。下部はよく見えないが、すっかりした雪

稜が山頂まで突き上げている。ルートになりそうに見える。

8月9日（曇り時々晴れ一時雨、雪） A隊（志小田、高橋、川崎）再びC1へ、B、C隊：レスト、D隊（石川、滝田）：C1→BC

飛田さんの持病である腰痛が悪化、B隊の高橋君と飛田さんを入れ替える。

天候はあまり良くなく、上部はガスがかかっている。8時にBCを出発し11時50分にC1着。始めの頃に比べて大分速くなり、4時間弱でC1に入れるようになった。途中でC1から下る石川さん、滝田さんとすれ違いエールを交換する。

レーションを食べての小休止の後、志小田、川崎で降雪で埋まっているであろうフィックスの掘り起こしに出る。3ピッチ程進む。この頃からガスが雪に変わり、やや湿った雪がしんしんと降り続く。14時のBCとの定時交信では下は雨とのこと。15時30分頃から雪は小降りとなり、明るくなる。

8月10日（曇り時々晴れ夜雪）、A隊（前回と同じ）：上部稜線ルート工作

天候は相変わらずはっきりしない。三角岩の上半分はガスのため見ることはできない。

8時30分C1を出る。3人でフィックスロープを黙々とユマーリングするが、前日の降雪で埋まっており、ピッチによっては掘り起こしに相当消耗する。三角岩は19ピッチ2時間ちょっとでトレース。

この先C2予定地までの稜線のルート工作を行う。視界が悪く、しばし立ち止まってはルートを確認しながらの登行となる。右側が氷河にスパッと切れ落ち、部分的には雪庇も出ているのでその点に注意しながら進む。C2手前と思われるピークまで11ピッチをフィックスしたところで完全にホワイトアウトとなる。

風が強く、気温も下がり始めているようだ。下との気温の差を感じる。15時、ガスと風の中、赤布、フィックスロープなどの荷物をデポし、下降を開始する。16時にC1に戻ると、B隊C隊がすでにC1入りしていた。

B、C隊（天城、野口、飛田、森山、加藤）：C1へ移動、石川、脇田、鮫川、滝田、森：レス

ト

朝出発しようとしたとき、脇田隊員から「胃から内出血が始まったようで、タール状の便が出る。昨年秋に胃潰瘍を患ったがそれが再発したようだ。リタイアしたい」という申し出があった。これで全員登頂の夢は消えた。胃を空にしなければ痛まないと言っていたので安心していただけだが、悪化させてしまった。下る必要があるかどうか聞いたところ、大丈夫という返答だったので、ともかく出発した。

C1着14時。A隊もC2直前までのルート仕事を終えて戻ってくる。

17時の交信で脇田隊員の様子が伝えられ、自力で歩けるうちにラサに下りたい、このまま放置すると吐血が始まるかもしれないと言う。飛田、志小田、天城で緊急に協議しているいろいろ悩んだ末、またしても飛田さんが付き添って下ることになった。熱の下がらない森隊員も下ることを希望していると言う。この日のうちに飛田さんはBCに下る。感謝とともに申し訳ない。

8月11日(晴れ) A隊(志小田、川崎) : C

## 2 建設

久しぶりの快晴の朝である。今日は昨日届かなかったC2までルートを付け、C2を建設する日である。日程的な余裕は既がない。

8時10分C1発。10時にBCからラサへ出る公路に向かう飛田さんと交信する。10時10分に三角岩をぬける。晴れているが昨日と同様風が冷たい。C2へ続く稜線は、部分的にすねから膝下位のラッセルがあり、酸欠にあえぎ、呼吸を整えながら登る。12時、広いプラトーのC2予定地に到着する。風の通り道のように非常に風が強い。

高橋君にテントの整理を頼み、志小田、川崎でアンザイレンし、ルートの偵察に出る。斜面をトラバース気味に栃木ルートに入っていくが、クレバスが眼下に縦横に走り、あまりいい感じがしない。登り返し、稜線上をもう少しにつめていって可能性を見ようと川崎君と進むが、小さなピーク迄あがって見ると、深いカールの縁を大きく巻いて稜線は延びており可能性を感じない。

再び下降し、栃木ルートに入る。雪田がつながっており、見た目ほど悪くはないことが分かる。赤



▲ニンチン・カンサ本峰両面

## ▼C 2



布をデポしてC 2に戻り、C 1へ下降する。途中でC 2への荷上げのB隊、C隊とすれ違う。

C 1着14時30分。休憩の後、そのままBCへ下山し、16時30分着。通訳の張さん、コックの黄さんが用意してくれた甘い紅茶が疲れた体にしみわたるようで非常にうまい。19時には荷上げのB隊もBCに下る。

B隊（高橋、森山、加藤）C 1→C 2→BC、C隊（天城、野口）C 1→C 2→C 1（泊）、D隊（鮫川、石川、滝田）BC→C 1

A隊から高橋隊員が荷上げに回ってくれた。頼もしい限り。他の隊員の倍近い荷を担いで登る。ヤクという異名をとるのもよく分かる。さぞ重たかろうに。高橋以外は三角岩の登りは初めてで、ヒマラヤ登山らしくなってきた、いよいよ佳境に入ってきた感じがする。A隊によって張られたロープにユマールをかけて1歩1歩慎重に登る。順番待ちもあり、4時間余りかかって稜線へ抜ける。ここからは緩やかな雪稜を2時間ほど行くと小広いピークにつく。この下の鞍部にC 2地点があった。C 3予定地、山頂が望める。複雑そうなルートで、視界がきかなければ先へは進めそうもない。天候が成否を左右することになるだろう。高橋、加藤の頑張りです張りのテントを立て、C 1へ。高橋、森山、加藤はそのままBCへ下り、A隊とともにアタック前の休養に入る。捻挫が治りきったわけではないだろうが、鮫川も石川、滝田とともにC 1入りしてきた。

8月12日（曇り） C隊（天城、野口、鮫川、石川、滝田）：C 1→C 2→BC、A、B隊：レスト

8時出発予定が1時間遅れて9時。鮫川隊員は苦しそう。フィックスロープに雪が付着しており登りにくい。昨日より1時間早くC 2へ着いたが、残念ながら何も見えない。とにかくこれでアタック体制は完了した。三角岩からは懸垂下降でC 1へ。ここで鮫川隊員からこの先の行動からのリタイアの申し出がある。先の見通しが明るくあとひと頑張りです登頂できそうであるならば慰留できたが、まだC 2からの見通しもついておらず、また捻挫も完治していないようだし、仕方がないかもしれない。2人でポツリポツリと話しながらゆっくりとBCへ下る。

飛田さんが葡萄とトレベの土産ともに戻ってきていて、脇田隊員の帰国を伝える。森隊員は趙さんと14日にBCに帰ってくるという。

8月13日（曇り一時雨） 全員レスト

志小田、飛田、天城でアタック体制の検討。メンバーは10人。テントの都合から4人と6人にするか6人と4人にするか迷ったがC 3への工作、荷上げのこともあり、また、1次隊のみのアタックとなった場合に1人でも多く山頂に送りたいので後者を選択。

1次隊：志小田、飛田、森山、加藤、高橋、川崎

2次隊：天城、野口、石川、滝田

鮫川、森はBCでサポート

1次隊がC 2で停滞しても1次、2次の入れ替えはなし。状況によるが、基本的には停滞1日ならば1次隊のみのアタック、2日になれば両隊ともアタックはなし。日程的には押し詰まっている。

## アタック体制整う

8月14日（曇り時々晴れ） 1次隊：アタックへ（BC→C 1）

薄曇りの中、他の隊員の激励の見送りを受けながら10時にBCを出発する。何度登っても単調で難儀なガレ場も「もうここを登るのはこれで最後だ」と自分をなだめつつ黙々と登る。

14時30分C 1着。ガスに囲まれたがすぐに切れる。デポしてある2次隊の個人装備をツェルトに移し、エスペース1張りを撤収する。お茶を沸かし、焼きそばを食う。

▼カヨ氷河源頭とニンチン・カンサ（○内はC3）



高所では1日の中で酷暑と酷寒を同時に味わうことができる。すなわち、陰れば寒気、一旦晴れるとテントの中は炎熱地獄である。

2次隊等：レスト

朝、1次隊を見送る。健闘を祈る。夕方、森くんが趙玲玲さんとともに戻ってきた。趙さんが骨付きの鶏のもも肉を買ってきてくれて夕食は特製のロースト・チキンを食べさせてくれた。

8月15日（曇り時々晴れ後雪） 1次隊：C1→C2

5時30分起床、曇り。食傷気味である定番のラーメンの朝食を食べ、7時10分にC1を出る。志小田と飛田が先行し、後から川崎が追いついてくる。10時に三角岩を越え、12時にC2手前のスノーピークに達する。残念ながらガスの為に本峰は確認できない。後ろの3人はやや遅れているようだ。

13時、C2に到着した加藤さんにテントの整理を頼み、志小田、飛田、川崎でルート偵察・工作に出る。コンテでクレバス帯の中に入っていき、雪面がつながっており見た目より悪くはない。赤布を打ちながら、1つのクレバス帯を越えてプラトールに出るが、次の雪田にもルートは容易につながる事が分かる。視界さえもらえば「いける」と確信する。

明日は暗いうちから歩き始めて、できればアタックまでいきたい。15時30分C2に帰る。疲れた。

2次隊：BC→C1

鮫川、森両隊員と、趙さん、張さん、コックの黄さんの見送りを得て出発。ガレ場の登りも今日が最後。三角岩を登るA隊の姿が確認できる。天気は良くこれならばC2から先ヘルートを伸ばす

ことができるであろう。2次隊にもチャンスはめぐってきそう。5時間弱でC1へ。

8月16日（曇り一時晴れ夕方雷雪） 1次隊：ダブルボッカでC3入り

早発ちの予定で4時前に起きるが、濃いガスの為、テントの中で明るくなるのを待つ。かなり寒い。

8時、明るくなって出発したがガスが非常に濃く間もなくホワイトアウトの状態になった。昨日の工作地点までは赤布を頼りに何とか進むがここでアウト。全く視野がない状態で前に進めない。強風とガスの中、寒気に耐えながらガスが切れるのをじっと待つ。C2に戻るべきか迷い始めた頃、ガスが切れる。われわれは、今日中にC3を作らなければ2次アタックのチャンスが消えるところまで日程的に追いつめられていた。

この晴れ間のチャンスをつかむべく、志小田、飛田が空身で赤布を打ちながらとにかくルートを延ばし、残りの4人で6人分のザックをダブルボッカしてC3を目指す。4人にとっては大変なアルバイトとなった。

11時50分、C3予定地点に志小田、飛田着。2人で4人の所に戻り、全員でC3に入ったのが13時20分。呼吸を切らしながら、ノロノロとテントを設営する。

この晴れ間を利用して、15時過ぎに志小田と飛田で頂上稜線ヘルート工作・偵察へ出る。懸垂氷河を回り込み、赤布を打ちながら1時間程ルートを延ばす。頂上まで雪面がつながっていることを確認し、C3に下る。

16時、2次アタックのためにC2入りした天城隊長と交信。この頃からまたガスが出始め、あられが激しく降る。遠くで雷鳴が聞こえる。

2次隊：C1→C2

10時発。滝田が先行する。交信で1次隊の苦闘が伝えられる。大変だろうが頑張ってもらいたい。やがてC3到着の報が伝えられる。これで王手がかげられた。

C2手前のピークからC3へのルート、C3のテントが確認できる。15時20分C2着。18時30分頃から約1時間、激しい雷と降雪があった。

## ▼一次隊登頂



### 登頂

8月17日（晴れ時々曇り） 1次隊：登頂

薄曇りの中、8時にC3を出発する。時折、ガスが濃くなり視界を失う。すねまでのラッセルが続き、傾斜が増すと共に苦しさが増してくる。喘ぎ喘ぎ、5歩進んでは、呼吸を整え、深呼吸と繰り返すという登りが続く。ピークそのものはガスの中、斜面の陰になり確認できない。ピーク下の黒く露出した岩と自分の高さの差がつかまってくることで自分が高みに進んでいることを確認し、じれる気持ちをなだめながら登る。

頂上直下、長くラッセルを務めてくれた高橋君に代わって川崎君がラッセル。「登攀隊長が先が上がれ」という飛田さんの言葉に固辞したが、背中を押されるようにして雪稜を越えると山頂に飛び出した。7,206m、周りにここより高い所はない。12時48分、志小田、川崎、高橋、飛田が登頂。ガスの中、周りの視界はない。山頂からヤムドク湖を見るのを楽しみにしていたが残念であった。当然のことながら今回の遠征も苦しいこともあったこともあったが、それらのすべてが昇華した瞬間であった。

やや遅れて13時11分森山さんが登頂。森山さんの笑顔の中には涙があった。13時40分、ガスの濃くなる中、加藤さん登頂。山頂で一服することを決めていたという加藤さん。登頂写真のあと旨そうにたばこをふかす。

14時5分に風が出てきた山頂をあとにする。団子になるアイゼンにいらだちながら、駆け下りるように下る。15時35分、既に2次隊が入っている

C3に戻る。笑顔で迎えてくれた天城隊長の顔を見て、1次隊としての責任を果たせたという思いを強くし、握手を交わした。隊長以下2次隊の祝福を受ける。差し出された甘い紅茶が腹にしみた。

2次隊へアタックルートの説明をし、明日の健闘を祈りつつC3を後にし、C2まで下った。C2着17時30分。短い日程でのタイムリミット寸前、こうして1次アタックは終わった。

2次隊：C2→C3

8時45分発。1次隊も山頂に向かっている。あわよくば2次隊も今日のアタックが可能かもしれない。ルートは1次隊によって丁寧に赤布が打たれており迷うことはないが、昨夜の降雪のためトレースは消え膝までのラッセルとなる。4人の間隔が縦に広がってきたが、アタック時の登り方の参考にするため交代でラッセルをするよう指示を出す。先ほどから滝田の状態が悪い。歩き始めればスピードはあるが休憩の時は本当に苦しそうだ。復帰後昨日まではあんなに元気だったのに、やはり順化行動が不十分だったのだろうか。11時45分C3着。

1次隊がニンチン・カンサ直下の斜面を登っている姿が見え隠れする。われわれも今日アタックするなら急がなければならないが、①この時点では1次隊のアタック時間が分からない、②滝田の調子が良くない、③夕方に雷があるかもしれない、の理由から今日のアタックは中止にした。

12時48分、待望の第1報が志小田登攀隊長から届く。良かった。心からの祝福と労いの言葉をかける。2次隊のメンバーもメッセージを送り、握手を交わす。13時40分には6人が全員登頂した。

滝田隊員は昏々と眠っている。熱は37度6分。ここまで来て残念だが下らざるをえないだろう。1次隊が戻ってきたら一緒に下ってもらおうかと思う。

4時前には1次隊が全員C3に帰還。喜びのひとつときをすこす。またしても飛田さんに付き添いをお願いをして、滝田隊員も1次隊とともにC2に下っていった。

8月18日（曇り） 2次隊登頂

2次隊の行動は野口さんの登頂記に譲りたい。

▼南方6,325m峰



昨日C2に下った1次隊と滝田のうち、志小田、高橋、川崎はC2にてわれわれのサポート。飛田、森山、加藤、滝田はBCへ。鮫川、森はBCからC1へ荷下げに上がりBCへ。

8月19日(晴れ) 2次隊:C3→BC、志小田、高橋、川崎:C2→BC、飛田、森山、加藤:BC→C1→BC(荷下げ)

昨日とうって変わって快晴。荷をまとめC3を後にする。何度も振り返り登頂の喜びをかみしめる。C2ではさらに荷が膨れる。三角岩を下るとC1にはBCから3人荷下げに上がってきていた。おにぎりを貰い一息。ここでもさらに荷は膨れたがゆっくりゆっくり下る。16時45分、最後の森山隊員がBCに戻って、すべての登山活動を終えた。なお残念ながらC1、C2間のフィックスロープ21本とスノーバーは力量不足のため残置した。

8月20日(晴れ) レスト

気候が変わったのか急に寒くなった。終日のんびりと身体を休める。夕食は張さん、黄さんが腕によりをかけてマーボー豆腐、大根の煮物、春雨のスープ等を作ってくれる。

8月21日(晴れ) 隊荷整理、BC清掃

すでに鮫川、滝田、森の努力でおおかたの装備の整理は済んでいたため作業は短時間で終わった。景色を見ながらのんびりとゴミを燃やす。

夜、BCじまいのささやかなパーティーを開いて、中国側スタッフの労をねぎらった。

(A隊、1次隊は志小田、他は天城記)

## 第1次隊登頂記

森山安次

▼南面6,674m峰



朝6時に起床しテントの外をのぞくと、昨夜来の小雪がちらちらしているが、アタックに出発する頃には天候が回復することを願って朝食にとりかかる。が、寝不足なのか食欲があまりないが無理やり天ぶらソバを胃袋に収める。

昨日の午後にルート工作した、志小田登攀隊長、飛田氏からの話で、メンバー全員今日中に頂上に立ち、C2まで下降する自信と決意で朝食を終わらせ出発準備にとりかかる。

テント内で身支度を終え、テントの外に出てみると霧のため、視界が50m位であるが、視界がだんだん良くなってきたので、登頂できると確信した。

気温は低くなく、しかも風がないのでオーバーミトンを使用しなくても大丈夫と判断し、ヤッケのポケットにしまう。

テントの周りの積雪状態や昨日のC2からC3までの積雪および、C3上部のルート工作した所の積雪状態から判断してアイゼンは装着せずに登ることにした。

積雪状態、頂上までのルートの傾斜等を考えるとピッケルよりストックの方がよいと判断して、ストックをC3まで持ち上げた5名は、ピッケルをザックに収納しストックを使用した。ピッケルを使用したのは、ストックを持ち上げなかった1名だけであった。

ザイルを使用することを考えて、全員ゼルプストバンドを装着した。

昨日のルート工作は、1時間程度なのでルート上に立てる標識の竹竿が20本以上C3にあるので、これを立てながら登攀するので持参する。

出発準備をしている時、ここ3日間の天候変化のパターンを考えると、午後5時前迄にC2まで下降していないと雷に遭遇するのでは、と思った。

あたりが明るくなり、小雪もやんだ8時頃C3を出発する。霧はまだ晴れてないが先程より視界は良くなり、昨日ルート工作で立てた、2本先の標識が見える。

昨日ルート工作で、標識の竹竿を立てた最終地点までは、傾斜はきつなくヒドンクレバスもないとのことなので、アンザイレンはしない。

昨夜の雪と風でルート工作でつけたトレースが消えておりC3出発からラッセルとなる。

C3の出だし1ピッチ目は自分がトップになって行く。トップを交代するまでのラッセルの深さはせいぜい足首の上位である。1本目の標識を右側（谷側）から通過しようとしたら、志小田登攀隊長が左側（山側）から通過するように指示したので、2本目からは左側を通過する。

出だしから3本目の標識の付近で「交代」という声で最後尾につき周りを見渡しながらくっきりと登っていくと霧はすこしずつ晴れてきて視界が良くなってきた。

交代してしばらく登った後、左後方を見ると昨日C3から見えていた上部にクレバスがある尾根を回り込んだことが判った。

交代した付近までは、トラバースであったがいよいよ頂上に続く斜面に入り、徐々に傾斜がきつくなってきたと共に、ラッセルの深さも膝下は当たり前で、ときどき膝より上になる場所も出てきた。

2回目のトップでは、雪の深さは膝下で所により膝上であるが、傾斜は一定なのでリズムを崩さずにすむ快適な登攀である。

昨日、ルート工作した最高到達点に到着したので、全員休憩となり、時計を見るとC3を出てから約1時間経過していた。

ここから先に、ヒドンクレバス等があるかもしれないのでトップとセカンドはコンテニューアンスになり、残りのメンバーは、ノーザイルで進む。自分はここから最後尾につく。

3、4番手についた人が、標識の竹竿を視界の範囲内に立てていく。

頂上が見えないなかつトップが数十m進んだ時、コンパスを見ながら登攀していた志小田登攀隊長が「左より（頂上稜線側）に登攀しているから右よりにルートをとるように」とトップに指示があり、トップは指示に従いいくらか右よりにルートを取った。これが正解であった。

霧が晴れ進行方向に頂上が見える。なぜ頂上と判断したかということ、周りのピークの中で一番高く、しかも今回の遠征前に日本で見た、中国の本（『中国登山指南』）に載っている写真と左右逆だけれど頂上の片側が切れている形が類似しているためである。

自分たちより低い所の懸垂氷河は霧で視界がきかないが、自分たちと同じ高さより上は霧が晴れ日差しが出てきて暑くなり、ヤッケを脱ぎたくなってきた。

2回目の大休憩をする。頂上までの距離とここまでのスピードを考えると、あと1時間半位ではないかと思った（実際は1時間半以上であった）。

最後尾で出発するが、頂上のはるか下で標識の竹竿が無くなってしまったので、登頂して竹竿がある所まで下山する間、天候の急変がないように祈った。

自分の前を登攀している人の登攀スピードが遅くなり、先行している4人との間隔が開く一方で、このスピードだと疲労が増大するだけであるし、追い越し可能な傾斜であるので、追い越して自分のリズムで登攀を続ける。

先行している4人が頂上と思われる頂きの陰に消えたので、時計を見ると12時45分前後であった。

傾斜はC3～頂上間のなかで一番きつい、頂上まであと100m以内と思われるから、午後1時には頂上には着きたいと思い、また着いた時なんと言おうかと考えながら登る。

午後1時過ぎてもまだ登攀中であるが頂上は目の前である。周りを見るといくらか霧が出てきたが、天候が悪化する兆候とは違う。

午後1時11分に頂上の片隅に立つ。先に登頂している4人の所に行き、手袋を取り素手で握手で交わした後、4人から祝福の言葉をかけられ、すでに開局されてるトランシーバーから、2次アタック隊の4名からも祝福の言葉をかけられる。

頂上は雲海の上のため周りの景色は何も見えないが、風は無く手袋とジャケットを脱いでも寒くなかった。

## 第2次隊登頂記

野口道雄

6時起床、朝食を食べ8時5分にC3を出発する。ヒマラヤの頂上を目指してアタックをするのは初めてで何か興奮する。

昨日、C3まで登りながら体調悪く、第1次アタックのメンバーとともに下山して行った滝田隊員がいないのが非常に寂しい。C3まで上がって体調を崩し登れないなんて本人も残念で仕方なからう。

昨夜からの降雪は止んでいるが天候はガスって視界20m~30mであるが、いつものパターンで晴れてくるだろうと期待する。安全を期して3人でツェルト、EPIガスおよびPPロープを分担、それに各人ハーネス、防寒衣に行動食を背負う。

C3周辺は新たに約15cmの積雪があり、残念ながら昨日の第1次アタック隊のトレースは完全に消えてしまっているが、表面クラフトしているのでこれはと期待したけれども、C3を設置したプラトローを抜けると足首上までのラッセルになり部分的には吹き溜まりで膝まで潜る。頂上は速いので交替でラッセルするが、視界悪く自分たちが何処の位置にいるのか分からず、ただ第1次アタック隊が設置してくれた赤布を頼りに登り続ける。

10時過ぎに一時太陽がガスの中に霞んで見え背中が暑く感じられ、晴れるかと思われたが駄目だった。ガスの中、雪の表面を見ながらラッセルをしていると雪面が光線によって2~3mmの雪の結晶が無数に浮き出てキラキラと輝きとても綺麗だ。雪の結晶の大きさが日本と違うのか。3人のラッセルのため疲れるが天候が悪化したら登れないのでとにかくピッチをあげて頑張る。

C2との交信で上部のルートの見通しがついたので、約6,800mの地点に不要と思われる思いツェルト、EPIガスおよびバーナー、ハーネスをデポして荷を軽くする。

突然、頼りにしていた赤布が途切れてしまったが、ガスの中、周囲を探してどうやらニンチン・

## ▼二次隊登頂（向って左野口隊員）



カンサの頂上への最後の斜面と解るが、ここでピッチがぐっと落ち1歩、登って呼吸を整えてはまた1歩登るといふ苦しいもので、やはり7,000mの高度だと実感した。この頂上への斜面は、部分的には30度の傾斜を超え、2日続きの降雪のため雪崩ないか細心の注意を払う。この斜面で天城隊長とラッセルを交替するとスイスイと登っていく体力には驚いてしまった。そしてやっとのことで天城隊長のところに行くとそのすぐ先が頂上であった。

この歳で7,000m峰に登れたとは夢のようであり涙を出しながら天城隊長と成功の握手をし抱きあう。石川隊員もすぐ登って来たので3人で5m先の頂上を同時に踏み再度、3人で握手をして喜びあう。時は13時50分でC3から約6時間の行動だった。また、天城隊長の頂上直下で私たちを待ち、一緒に頂上を踏むという行為にも大変感激した。

「天城隊長、志小田登攀隊長、隊員の皆さんほんとにありがとう。」「応援をいただいた我が東京白稜会、会社の人たち、登れたよー、ありがとー。」「家内、娘、ありがとー」と心の中で叫ぶとまた胸が熱くなってきた。残念ながら頂上はガスで何も見えなかったが登頂できただけで大きな喜びだ。

思えば1957年に東京白稜会に入会以来、「白き神々の座」ヒマラヤに魅せられ1度は登ってみたいと思いつつこの頃の時代はかなわず、その後の外国勤務、家庭事情等で中断したもの1度灯いた火は消せず10年程前より山登りを再開し、1994年東京白稜会50周年記念のライラ峰（6,986m）の遠征隊に参加したが敗退、今回日本ヒマラヤ協会

の遠征に入れて貰いほんとに尊い幸運を射止めることができた。

今遠征隊でも高山病等でラサの病院に入院したりした人が中国登山協会の連絡官を含めると6人もいたし、またそれまで天候が悪く第1次アタック隊の登頂がぎりぎり第2次アタック隊は無理かもしれないと思っていたので大感激である。とりあえず無線でC2にいてサポートしてくれた志小田登攀隊長たちに登頂連絡をする。志小田登攀隊長も大喜びで祝福してくれる。

「野口さんほんとにおめでとう、野口さんには隊の誰よりも登って欲しかった。良かった、良かった。」「ありがとうございます。この歳で良く登れました、みんなのお陰です。」胸がこみあげて思わず涙声の交信になる。

C2で志小田登攀隊長と一緒にサポートしてくれた高橋、川崎隊員も祝福してくれ忘れられない時になった。天城隊長、石川さんも喜びの交信の後、3人で登頂の記念写真を撮りあって下りにかかるが、年齢による疲れか、高度差700mのラッセルで疲労したのか、足元がどうもふらついてバランスが悪い。自分ではもっと体力があると思っていたがこんなに消耗したのは初めてである。このルートは危険な場所がないがもし厳しいルートの下りだったら大変だと思った。天城隊長は赤布を回収しながら下っているので私も手伝うがこの作業も結構疲れる。

1次アタック隊は頂上からC3まで1時間15分で戻っていたが、私たちはホワイトアウトのガスの中を彷徨しているような感じで、2時間もかかってやっとC3に戻ることができ、そこでようやくほっとする。石川隊員も私同様だいぶ疲れている様子で、計画ではC2まで下る予定であったが時間も遅いし、今日はC3泊まりにしてもらい明日C3より一気にBCまで下ることにした。

C3 (8:05) → ニンチン・カンサ頂上 (13:50 ~ 14:30) → C3 (16:30)

### 帰路キャラバン

8月22日 (晴れ) BCからラサへ

25日間過ぎてきたBCも今日が最後の日である。その間病気・天候不順・村人による小物盗難

など辛かったこと、楽しかったことが思い出される。隊荷は昨日が終日休みであったためある程度プラパールに収めていた。メステントと5つのテント分の共同装備と食糧を撤収する。その後プラパール等をヤクに荷積みするのは思うようにはかどらない。この村のヤクは積まれるのを嫌がり積んだ後あばれ、荷物をたたきつけたり、山の中腹に逃げ込んだり、牧童たちも手を焼くヤク立たずもいた。そんなわけで22頭のヤクに積むのに、2時間もかかってしまった。マヨン村の人家手前まで1時間のキャラバン途中、白い峰々の上空にひとすじの虹が浮かび、まるでわれわれを見送っているかのようだ。

カンパ・ラから望むヤムドク湖の雄大な景色は菜の花も見られず、すでにすっかり秋の趣であった。午後6時にはラサのヒマラヤホテルに到着する。ヒマラヤ協会に無事を報告すると、神奈川隊の爆風雪崩遭難を聞かされショックを受ける。われわれの家族もどんなに心配をしたことだろう。

8月23日 ラサにて隊荷の整理

今日はチベット登山協会倉庫にて残った食糧や共同装備を整理し、テント等を乾かしたり、倉庫に収納する共装リストに記入した。午後は、八角街にある洋風レストランにて、思い思いのメニューを存分に舌づつみを打ち満足。その後は自由行動で、大昭寺見学する者、新華社書店にてチベット地図を買う者もいた。ホテルでは漢字にチベット文字入り篆刻印鑑が土産品として注文を受けていた。

8月24日 ラサ

午前中はポタラ宮殿見学。ラサの盆地からはひととき高い居城で急な階段を登る。宮殿の中には僧侶があまり見あたらず、人民解放軍風の守衛が目についた。暗がりの城内から仏像やら、歴代の王の座像が見られ、かつての政教一致の強大さが偲ばれる。ラサの印象は予想以上物が溢れ、ファッションも大都会並みと感じた。とにかくカラオケの店も多く、夜の女たちが昼間から客を呼び込む店が軒を連ね、ネオンサインが目についた。

夜は1か月お世話になったコックの黄さんとお別れ晩餐会をした。口数は少ないが誠実さがにじみでて、日本人好みの、しかもラサのレストラン

よりおいしい食事をたくさん作っていただき感謝にたえない。

8月25日 ラサから成都へ

5時起床、ラサから成都間では2時間弱の飛行であるが、機中にて、ナムチャ・バルワ、ミニヤ・コンカ峰が遠くにはっきり望めた。成都の昼はとにかく暑い。四川省登山協会のマイクロバスに乗りゴージャスなラサグランドホテルに着いた。この地は三国志の舞台になり諸葛孔明などが活躍した土地柄で、「武侯祠博物館」もある公園を訪れた。夕食は本場の火鍋で野菜・肉・魚など数え切れない品目を好きなだけ取るバイキング形式、とにかくすべてチャンポンとはいかにも大陸的な料理で楽しい一時を過ごすことができた。

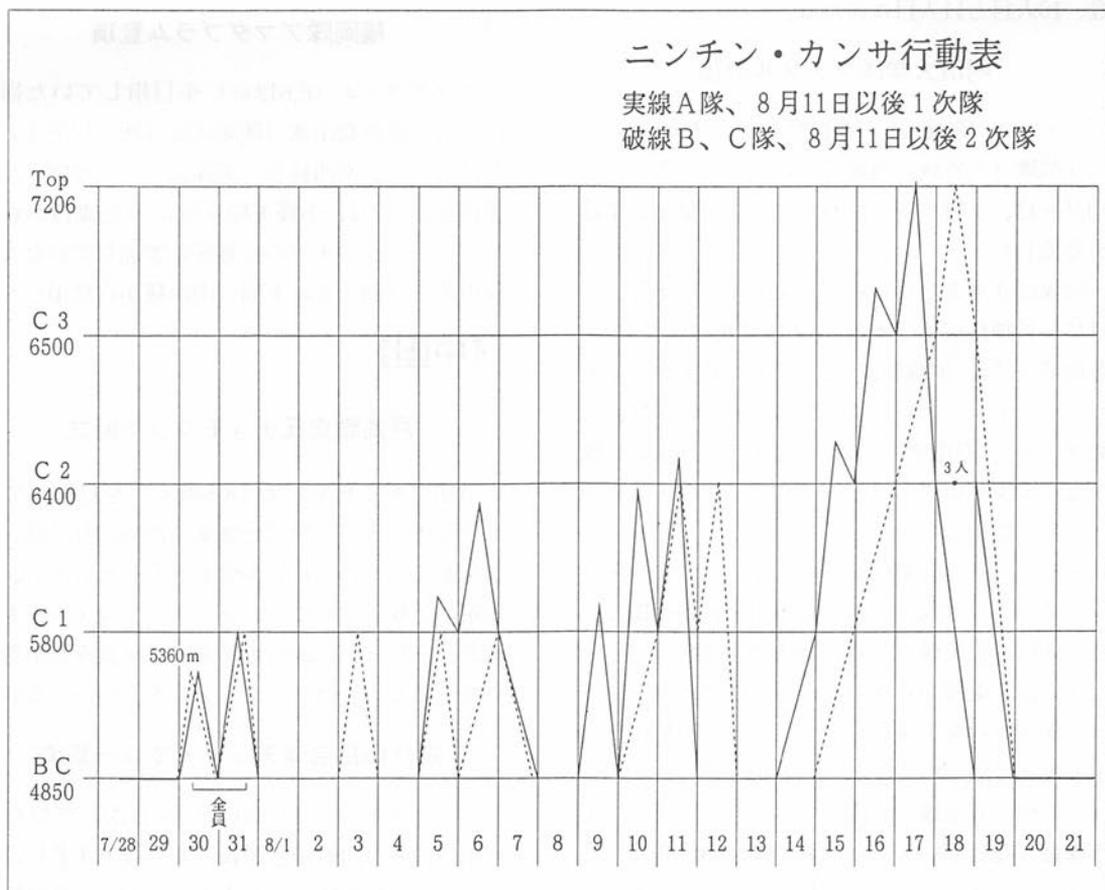
8月26日 成都から北京へ

早朝、通訳の張さんが見送りしてくれた。彼は明朗快活で料理を作ると「おいしいですよ」の大きなかけ声。それだけで食欲がわいてしまう。実際これがおいしいのだ。来年2月に来日するとい

うので再会が楽しみである。2時間30分で北京に到着。前門飯店に着くと山森専務理事と35日ぶりに再会、登頂を喜んでくれた。ホテルでは今回の登山隊の反省会と報告書の打ち合わせ等をした。夕食は中国登山協会の方々を高層ビルの中にある日本料理店に招待し、曾曙生主席の挨拶、天城隊長のお礼の挨拶を交わした後、9名の登頂証明書を一人一人授与され、皆存分に感激し、最後の晩餐を心ゆくまで楽しんだ。連絡官の趙玲玲女史ともこの日が最後である。BCとラサの病院間を2往復も快く同乗していただき本当に助かった次第である。

8月27日 北京から成田へ

いよいよ今日中に日本の家族のもとに帰れる。とはいえ、帰ればまたあわただしい仕事が残っているとすると複雑な心境である。成田に着けばそれぞれが家族の元に散り、ひと夏の青春は終わった。  
(鮫川太一記)



## 地域ニュース

### 《ネパール》

#### 労山隊ローツェ登頂

ローツェ (8,516m) を目指していた日本勤労者山岳連盟隊 (近藤和美隊長 (55) 以下10名) は、10月21日午後3時50分、長岡健一 (42)、坂本正治 (38) 両隊員が登頂に成功した。

同隊はロブジェ・イースト (6,119m) で順応活動後、9月17日にBC (5,350m) を設営、10月15日、16日とアタックしたが悪天候で断念。近藤隊長、長岡、坂本、永田幸一 (39) の4名で三次隊を結成、19日C4 (約7,900m) 入りし、21日天候の回復を待ってアタックした。

日本人による同峰の登頂は1986年のベルニナ山岳会隊以来で、今回の登頂は日本隊としては第5登、10人目と11人目にあたる。

#### 明治大学隊マナスル登頂

マナスル (8,163m) を目指していた明治大学山岳部隊 (三谷統一郎隊長 (41) 以下8名) は、10月8日、9日の両日にわたり、北東稜から全員が登頂した。

同隊は9月5日にBC (4,900m) を設営、8日に三谷隊長以下山本篤 (35)、高橋和弘 (23)、豊島明 (23)、加藤慶喜 (21) の4隊員とシェルパのベルテンバの計6名が登頂。翌9日には、広瀬学 (30)、原田暁之 (32)、関裕一 (22) の3隊員とシェルパのプルバ・ツェリン、ダワ・ノルの計5名が登頂した。

また、同じく北東稜から挑んでいたガイヤ・アルパインクラブ隊の小西浩文、山本正嘉両氏は、10月8日、悪天候のため7,700mで断念した。

さらに、東稜から挑んでいた鈴鹿アルパインクラブ隊 (中村金夫隊長以下5名) は、10月12日、悪天候と雪崩の危険性から6,300mで断念した。

この他、北東稜から挑んでいたペテル・スベルカ隊長 (42) 率いるスロバキア隊は10月8日、ミロスラフ・リバンスキー (41) とユラト・カルド

ホルト (31) の両隊員が登頂したものの、リバンスキーはC3 (7,400m) からC2 (6,700m) への下降中に心臓発作を起こして死亡、カルドホルトは8日から9日の間に消息を絶った。

また、同10月8日には、アメリカ隊のチャールズ・メイス (39) とアラン・マクファーソン (40) それにスペイン隊ではファン・エウセビオ・オヤルサバル (39) とムルア・ホセ・フェルナンデス・オルティス (32) 他2名が登頂した。

#### ブルガリア隊ダウラギリI登頂

ダウラギリI (8,167m) を目指していたブルガリア隊は9月24日、トンチョ・トンチェフとニコライ・ペトコフの2名が北東稜から登頂した。

なお、北壁ペア・ルートを目指していた日本山岳会青年部隊 (松原尚之隊長以下8名) は、9月8日にBCを設営、C4までのキャンプを設けたものの大雪のため10月30日アタックを断念した。

#### 福岡隊アマダブラム登頂

アマダブラム (6,812m) を目指していた福岡山の会主管の登山隊 (関剛隊長 (26) 以下4名) が10月15日、南西稜から関隊長、上田恵爾 (25)、重川英介 (23)、小澤美樹 (26) の全隊員が登頂した。また、ドイツの公募隊に参加していた大久保由美子 (28) さんも同日南西稜から登頂した。

### 《中国》

#### 戸高雅史氏チョモランマ断念

単独でチョモランマ (8,848m) を目指していた戸高雅史氏は、降雪と強風のため10月2日、登頂を断念した。当初北西壁を予定したものの、不安定な気候と雪質の悪さからノーマル・ルートに転進、9月12日、26日とアタックを試みたが雪崩や強風のため失敗し、チャンスをうかがっていた。

#### 泉州山岳会隊チャー・オユー登頂

チャー・オユー (8,021m) を目指していた泉州山岳会隊 (角谷道弘隊長 (32) 以下4名) は、9月26日、角谷隊長と坪佐圭子 (37)、前田勝司

(28) 両隊員の3名が登頂した。

## トピックス

### ハリウッド威圧!? 怪文書

江沢民中国国家主席が訪米中、米国内で、中国の司法制度を批判したり、チベット問題を描くハリウッド映画が次々に封切られたが、中国政府が作成したかのような「メモ」が映画会社の間で回った。「メモ」の出所についてははっきりせず、マスコミ、あるいは話題作りをねらったハリウッド映画産業によるもの、という見方が出る一方、中国政府が製作会社との取引打ち切りを命じた、との報道も飛び出すなど波紋を呼んでいる。

メモで“やり玉”に挙げられているのは、ウォルト・ディズニーの「クンダン」、MGMの「レッド・コーナー」、コロンビア・トライスターの「セブン・イヤーズ・イン・チベット」の三作品。

「クンダン」は、ダライ・ラマの一生について描いたマーチン・スコセッシ監督作品。また、日本では12月13日封切り予定の「セブン・イヤーズ・イン・チベット」は、ハインリヒ・ハラ役を人気俳優ブラッド・ピットが演じている。

(11月2日 読売新聞)

## インフォメーション

### パキスタン登山申請に推薦状不要

これまでパキスタンでの登山申請に必要とされてきた日本山岳協会の推薦状が、1997年秋の申請から不要となった。今後は、登山隊が直接在日パキスタン大使館かパキスタン政府観光局に許可申請しての許可取得が可能となった。しかし、有事対策の面からも、許可取得後には日山協と外務省への計画書送付を忘れないで欲しい。

### 第10回海外女性懇談会のお知らせ

日本山岳協会主催の第10回海外女性懇談会が、下記の通りに開催される。

記

日 時 12月11日 木曜日 18時30分～21時

会 場 岸記念体育館

渋谷区神南1-1-1 ☎03-3481-2396

参加費 千円

内 容 「ヒマラヤ登山、計画から実行まで、出発前もたいへん」講師：沢田幸子、吉田文江、大久保由美子

懇談会 前半に報告を聞き、後半に参加者全員で行なう。

申込み 日本山岳協会事務局

渋谷区神南1-1-1 ☎03-3481-2396

FAX03-3481-2395

お願い

1998年2月から郵便番号が7桁になります。お手数でも皆様の新しい郵便番号をお知らせ下さい。

訂正

ヒマラヤ313号14頁地域ニュース欄〈ネパール〉の登山規則一部改正記事中、「入山料1万ルピーを支払わなければならない」とあるのは、千ルピーの間違いです。深くお詫び致します。

### 30周年資金協力者ご芳名

10口 佐々木千恵 5口 植松秀之、飛田和夫  
3口 品川幸彦、石川龍彦、督永忠子、大西保、保坂昭憲 2口 田村正勝、菅原和明、清水修、寺田勉 1口 伊原哲士、須藤圭一、川崎浩史、森保仁、中野圭一、青木茂、関根吉江、中村広  
総計185名4,167,000円 (1997.11.25現在)

### お知らせ

事務局の仕事納めは12月26日、仕事始めは1月6日となっております。従って12月27日～1月5日は休業致しますので、ご了承下さい。

### 東京集会のお知らせ

日 時 12月22日(月) 午後7時～  
連休狭間ですが忘年会とします。  
場 所 HA Jルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)  
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

## ■ 寸 感 ■

10月に入り30周年記念誌の編集を始めた。何せ30年の長い歴史である。しかも活動は広範囲だ。集った会員も2600名を超える。量は膨大である。

読み返した機関誌から様々な声が聞こえてくる。あの書類、このファイルをめぐりながら空白の歴史を埋める作業に没頭する。

行動する集団として、何よりも活動に参加した人々を確定しなければならない。

会の流れは時代と共に大きく変化した。年史をまとめながら万感の想いである。 (山森)

### 事務局日誌 (11月)

- 6日(木) 東北地区海外登山研究会2000年チョモランマ登山名義後援の件
- 12日(水) CMA李豪傑氏からエヴェレスト登頂者数の件(早大留学生)
- 17日(月) 東京集会(9名)
- 18日(火) CMAへ30周年の件依頼
- 19日(水) わらじの仲間40周年記念(山森)

- 20日(木) HJハリシュ・カパディア氏と、ネパール、ハルカ・グルン氏へ30周年の件依頼
- 21日(金) ニンチン・カンサ決定通知書
- 25日(火) 原田達也さんを偲ぶ会(遠藤、山森、八木原、尾形、寺沢、中川)
- 29日~30日 第11回東北地区海外登山研究会(田沢湖、山森)

### ヒマラヤ No.314 (1月号)

平成9年12月10日印刷 10年1月1日発行

発行人 稲田 定重

編集人 山森 欣一

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7

萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



### ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高压バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター  
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店 : 日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先 : 株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL : 03-5245-0511 FAX : 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

## TREASURE TOUR



## EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、  
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテンラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

## 遙かなる高みへ



個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク



キャラバンデスク TEL03-3237-8384

～地球の果てまであなたのキャラバンのお手合い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。  
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山  
シルクロード・秘境旅行  
のバイオンア



## 株式会社 西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)1391(代表)

キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)8384(代表)

大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)

カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU. NEPAL ☎221707

運輸大臣登録一般旅行業607号

# ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



## Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店/〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店/〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店/〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館/〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店/〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店/〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(64)5707
- 高崎店/〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店/〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店/〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブルーカ店/〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブルーカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店/〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店/〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店/〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店/〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店/〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店/〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店/〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メールオーダー)/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004